

研究報告 1 富山市婦中町田島地内で見つかった石棒について

細辻嘉門・三上智文

(富山市埋蔵文化財センター主査学芸員・嘱託学芸員)

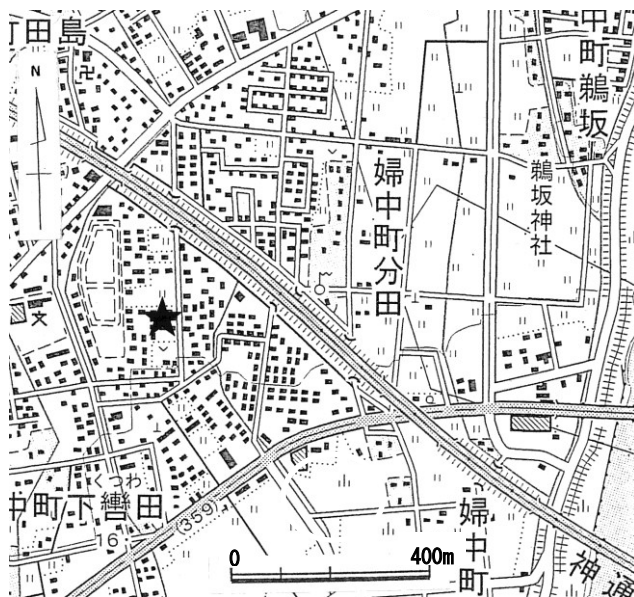
1 現地の概要と収蔵までの経緯

婦中町田島地区は、富山市中心部から南西に 4.5km の神通川左岸の緩扇状地・氾濫平野に立地する。近年住宅団地として開発が進んだ地域である。地区の北東から南西に旧国道 359 号が通り、南東から北西にかけて北陸自動車道が通る。東北東 0.9km には延喜式内社の鵜坂神社がある。

平成 27 年 5 月、市民から「婦中町田島の住宅街の路地に石棒が落ちている」との情報が寄せられたため、5 月 19 日現地に行き、石棒であることを確認した。その後、鵜坂地区センターや婦中総合行政センターにおいて、現地が市有地で、石棒が個人の所有物でないことを確認し、平成 27 年 5 月 28 日、石棒を現地から拾集して、管轄する富山西警察署で拾得物としての手続きを行った。

平成 28 年 2 月現在、現地は周知の埋蔵文化財包蔵地には該当しない。周辺の田畑を歩いてみたが他に遺物は見られない。近隣にも縄文時代の遺跡は所在しない。このことから、石棒はどこか他の場所で拾われ、現地に移動した可能性が高い。

(細辻)



現地周辺図 (S=1/15000)



石棒確認時の状況 (西から)

(中央部白円が石棒)

2 遺物の概要

縄文時代の石棒 1 点である。完形品で全長・全幅・厚さ・重量・石質・色調は以下の表の通りである。

全長	全幅 (最大幅)	厚さ	重量	石質	色調
81.9 cm	16.0 cm	17.5 cm	37.0kg	凝灰岩 (産地不明)	7.5Y 6/2 灰オリーブ(注 1)

上端部表側は台形状の加工が施され、側面からみるとつぶれた三角形となる。裏側は八の字のように広がり、その下には「くびれ」が見受けられる。また、下端部にもわずかではあるが、同様の「くびれ」が見受けられる。下端部は平面に加工している。さらに側面側の上端部と胴体部の間にこぶし大(長さ 9cm・深さ 2mm 程度)の敲打によると思われる「くぼみ」を 1 箇所確認した。色調は主に灰オリーブであるが、全体に赤っぽく(7.5YR 4/4 褐色)変色し、一部には黒っぽく(10YR 4/1 褐灰色)の変色した箇所もある。

表面は敲打痕の見分けがつかないほど研磨整形している。しかし、光の当て具合や手の触感により、わずかではあるが全体に敲打痕が残るのがわかり、風化の影響は少ないと考えら

れる。石材を大まかに成形した後、細かく敲打することで形を整えて、さらに磨くなどの調整をしたと考えられる。ただし、上端部に行くほど、研磨整形を入念にしているためか敲打痕は比較的少なくなっている。下端部も、石材の自然面が残らず、丁寧に調整・平面加工していると考えられ、特徴的である。試しに平面上に置いたところ、特に支えも不要で簡単に屹立した。なお、端部を平面的に加工・調整する石棒は、東北地方北部の端部彫刻石棒で類例が見られる(阿部 2015)。背面下端部の一部には引っ掻いたような傷があり、後世の傷であると考えられる。

3 若干の考察

富山市内における大型石棒は、確認できている完形品としては八尾町の妙川寺遺跡で採集された彫刻石棒【全長 94cm】(富山市教育委員会 2007)に次ぐ大きさである。

また、形状的特徴から、本石棒は頭部(先端部)形態における分類判別として、
(1)小島分類(小島 1976)では、亀頭部に段をつくり、先端部を張り出させるⅥ型。
(2)大矢分類(大矢 1977)では、単頭石棒Ⅰ型:頭部形状b類(上端部)およびc類(下端部)。
(3)長田分類(長田 2012・2013)では、最大径 10cm 以上、断面円形・刃部無し、頭部が先細る形状となるⅣ類・三角型(上端部)およびⅡ類・鏢型(下端部)に該当する。

長田氏は、頭部形態による細別設定は石棒の素材選択時に形状はほぼ決定しているため限界があり、むしろ素材選択と製作技術の検討こそ、細別における重要な分類属性になりうると述べており、大型石棒における三類別(長田 2012)によれば、縄文中期後半に柱状節理の自然礫を用いた一群に分類される。よって、この石棒の時期は、縄文時代中期後半から後期初頭と推定される。長田友也氏からは、「石棒は、用途として、土中に埋めて屹立して祭られるため、一般には下端部を平坦に加工・調整はすることは少ない。しかしこの資料は下端部を平坦に加工しているので、縄文時代のものかどうかは一考を要するであろう。」とのコメントをいただいた。記して感謝いたします。

大型石棒は、出土事例そのものが少ないため、今後、この石棒の出土地の解明を行ってきたい。
(三上)

(注 1)色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1995 年版』に拠る。

引用・参考文献

- 阿部昭典 2015「大形石棒の出土状況 東北系の端部彫刻石棒の事例」『月刊考古学ジャーナル No.678』ニューサイエンス社 pp. 13-17
- 五十嵐俊雄 2006『考古資料の岩石学』パリノ・サーヴェイ株式会社
- 泉拓良・西田泰民ほか編 1999『Imidas Special Issue 縄文世界の一万年』集英社
- 大田区立郷土博物館編 2001『ものづくりの考古学—原始・古代の人々の知恵と工夫—』東京美術
- 大矢昌彦 1977「石棒の基礎的研究」『長野県考古学会誌 28』長野県考古学会 pp. 19-44
- 小熊博史 2015「北陸系彫刻石棒の事例」『月刊考古学ジャーナル No.678』ニューサイエンス社 pp. 8-12
- 長田友也 2012「石棒の製作と流通」『季刊考古学 第 119 号』株式会社雄山閣 pp. 79-84
- 長田友也 2013「石棒の型式学的検討」『縄文時代 第 24 号』縄文時代文化研究会 pp. 33-57
- 小島俊彰 1976「加越能飛における縄文中期の石棒」『金沢美術工芸大学 学報 第 20 号』金沢美術工芸大学 pp. 35-56
- 小島俊彰 1986「鏢をもつ縄文中期の大型石棒」『大境 第 10 号』富山考古学会 pp. 25-40
- 鈴木道之助 1991『図録石器入門辞典〈縄文〉』柏書房
- 戸沢充則ほか編 1994『縄文時代研究事典』東京堂出版

戸田哲也 1997「石棒研究の基礎的課題」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社 pp. 91-108

富山市教育委員会埋蔵文化財センター2007『縄文人の精神文化－富山市出土の石棒と石冠展－』〔解説パンフレット〕

益富壽之助 1987『原色岩石図鑑〈全改訂新版〉』株式会社保育社



石棒全体



先端部のくびれ



中央部のくぼみ



石棒下端部



石棒実測図 (S=1/5)

注 1：網掛けは「くぼみ」を観察した箇所である。

注 2：破線部は黒色（10YR 4/1 褐灰）に変色した箇所である。

注 3：赤褐色（7.5YR 4/4 褐）の変色は石棒全般に広がる。